

書簡にみる谷崎潤一郎（下）

― 出発期の谷崎とその周辺 ―

永 栄 啓 伸

（7）母の死、そして「孤独な生活」へ

先日父上とも相談の上今度いよ／＼十四日にお千代と赤ん坊とを蛸殻町の方へやる事にした。就いてはまだ當分お前も其處に居るのだらうから、私だけは蛸殻へとまらない事にする。赤ん坊には女中を附けてやるからなるべくうるさくならないやうにする。右前以て一寸知らせて置く。

○ 大正六年六月十二日、小石川原町より谷崎精二宛。全集書簡番号三六。

全集で見るとわずか三行、妻子を実家に預けるといふ用件のみの手紙であるが、この前後には注目すべき事件が連続している。

実生活のできごとを見る前に、もう一通の手紙を紹介してお

きたい。前回ふれた「文壇名家書簡集」（新潮社）には、この短い書簡とともに三通が収載されているのだが、なぜか以下の書簡は全集に収録されず、精二の「明治の日本橋・潤一郎の手紙」にも紹介されていない。「静かな孤独な生活を」というタイトルをつけた精二宛書簡で、前回と今回の手紙を密に繋ぐ内容なので次に掲げておく。

きのふ、お前の所へ瀧田君が行つた筈だが、その節予のことにつき、何か話がありし事と思ふ。実は今度、少し生活の法を一変し、出来るだけシムブル、ライフを送つて見る積りにて、妻の老母を田舎へ返し、妻と子供を蛸殻町へ預け、女中に暇を出し、書生を置いて、静かな、孤独な生活を送つて見る積りなり。事に依ると、家をもつと郊外の、狭き安き方

へ移転するやも知れず。実はお前の結婚まで待つて居る筈であつたが、さう極まつたらなく、気が落ち着かず、ソレに斯うして日を送つて居ると、ムダな生活費がか、つて困るので、一日おそれれば一日の損あり。就いては甚だ気の毒ながら、お前の体を何とか処置してくれまいか。尤も、お前の方でさへ邪魔でなければ、お前が蠣殻町に居ても、妻と子供を預けるのに差支へはない。お前が居る間は、妻と子供とは寝る所さへあれば構はない。なるべく今月中旬のうちに、片付けたいと思つて居る。都合いかゞ。

近日中蠣殻町へ行つて、両親にも打ち明ける積りだが、予めお前の意向をきいておく。

至急返事待つ。

四月九日(大正六年)

潤一郎

精二殿

書かれた日付が前回の瀧田宛書簡と同じ四月九日であることに注目される。そして全集に記された書簡番号三五の手紙が、「四月九日 小石川原町十三より日本橋蠣殻町一ノ二谷崎精二宛」の封書であり、中身を欠いている点を考えると、この手紙がそれに該当するものと見てはば間違いない。内容も瀧田に宛てたものと符合している。

それにしても、妻子を預けることに決めたから、精二に身の

置きどころを考えてくれとは強引と言うほかはない。総領の強みか、谷崎自身の身勝手か。「なるべく今月中旬のうちに」実行の予定だったものが、実際は、掲げた手紙にあるように六月十四日に延期されている。その間に起こった大事件のためである。大正六年五月十四日に母、関が丹毒から心臓麻痺をおこして死去したのである。発病は四月二十四、五日と推測されるが、少なくとも谷崎夫妻が病状を知るのは、記録上、三十日である。「晩春日記」(「黒潮」大六・七)にその経緯が次のように記録されている。深夜、帰宅してみると「奥の四畳半に通れば、赤児と共に寝るたる妻、しどけなき寝間着姿にて伏戸よりたち出で、今夕、日本橋の父上より端書にて、母上にはたゞならぬ御病氣との趣、急ぎお見舞に参ぜんとは思ひしかど、当方にも病人の赤児を抱へて一刻も手放し難く本意なきことなりと云ふ。母上の病氣は何ぞと問へば、これ読み給へとて差し出す端書に「病名は丹毒」とあり。」と。

選りによつて、なんとという忌まわしい病氣に冒されたのだ、と谷崎は嘆く。孫の顔を見るために、日曜ごとに日本橋から遊びに来ては、庭で孫を膝に抱いて楽しく平安な日々を送っていたのに。さらに折り悪く、娘の鮎子はリンパ腺を腫み張らしていた。丹毒のような伝染性の病氣の見舞いに千代を遣るわけにはいかない。伝染性だからといって母の苦しむのを捨て置けなといひ張る千代に、谷崎は行くことを禁じた。菌をもらつて

きて鮎子に伝染でもしたらどうするかと言った。「父となりて」で悪態をついたハ父Vとは思えぬ言動である。父親も再び葉書をよこして、伝染のおそれがあるから見舞いに来るに及ばず、と書いてきた。しかし翌日谷崎が見舞うと、父や看護婦のそばで、思いがけなく千代が猷身のな看病している。妻の優しさに感謝するより、我が意を背かれた腹立たしさをおぼえた。

谷崎にとって、母とはあくまで落魄する以前の、まだ幼い日々、豊かな暮らしに生きる美貌の人でなければならなかった。その「色白くきめ細かく眉目秀で、君が姉上にはあらずやなどと屢々人に疑はれし若々しき容貌」は、いま「首全体は此の世のもの」とは思えぬほど醜く腫れて高熱に悶え苦しんでいる。「ひたすらに胸つぶる、はかりなり。」と書き記すように、心から醜悪へのおぞましさと恐怖を感じて、しばらく消えることはなかつたらう。その意味でも、谷崎内部にハ醜Vへの嗜好を指摘する考え方には、私は懐疑的である。谷崎が母を見舞うのはこれが最後となった。五月四日には、丹毒は全快したかに見え、父も電話でもう大丈夫だと言うので、「黒潮」「婦人公論」など雑誌への原稿執筆のため、伊香保温泉へ出かけてしまう。その前夜、千代は「深夜に及びたるころ、妻われを呼び起してさめざめと泣き、いつごろ東京へ帰りたまふや、君は妾を疎んじたまふや、つれなしなど云ひてさまぐに掻き口説く。おろかなりと云へどまた哀れなり。妻が涙と我が涙と、一つになりて我

が頬を流る。」と「晩春日記」は閉じられている。創作とはいえ、夫婦仲がまず円満であることを谷崎は描こうとしている。

宿泊先の千明（ちぎら）仁泉亭で、母危篤の電報を受け取ったのは、当日十四日の朝であった。ちょうど三日前には、萩原朔太郎と室生犀星が訪ねてきた。すぐさま電車と列車を乗り継いで夕刻日本橋に着いたとき、すでに母は死亡していたが、顔は丹毒の痕跡もなく白蠟のように晴れ晴れとしていた、と安堵したかのように「異端者の悲しみはしがき」に書いている。醜い母など許容できないイメージだったに相違ない。

今絶ゆる母のいのちを見守りて「お関」と父は呼びたまひ
けり

臨終に間に合わなかったが、その時、父が母の耳許で一声名前を呼んだという人の話を聞いて、後年「おふくろ、お関、春の雪」（昭三五・一）で谷崎はこのように詠んだ。しかし精二の記憶によれば、これは母の死後まもなく脳出血で倒れた父が、大正八年二月二十四日に息を引き取る間際、「おせき」と半ば無意識に母の名を呼んだものであったと訂正し、また終平はそれを否定して、実際は幼い自分（終平）を残して逝くことを心配して繰り返し「終平」の名を「廻らぬ舌」で呼んでくれたのだと記している。

*

潤一郎が妻子を預けようとした蛸藪町の家は、大正四年、伯

潤一郎が妻子を預けようとした蛸藪町の家は、大正四年、伯

父の久兵衛が自殺^(注)した後、実弟である父倉三郎が店を管理するため転居していたもので、父と精二と十才の弟終平の三人暮らしであった。まもなく養女に出されていた妹の伊勢も小松川の伯父谷崎萬平の家から帰ってくるが、母の死によって男世帯になったことが格好の理由となつて、手紙にある通り、六月十四日、千代と鮎子は斬殺町に移つた。創作のために、静かで孤独な生活をするという大義名分のもとに実行されたのだが、その微妙な動機について、精二は「実は他に理由があつたようにも思われる。」と遠回しに否定し、野村尚吾はもつと露骨に「潤一郎は結婚二年にして、早くも妻と別居生活に入つたのである。」と記す。つまり潤一郎は体よく妻子を追い出し、義妹のせい子と書生との三人で暮らし始めたというわけである。「痴人の愛」のナオミ造形のためのモデルと言われるせい子は、明治三十五年生まれだから十五才であつた。大正六年に千代を入籍するにあたり、代わりにせい子を石川家の養女とし、向島の初子の家から小石川原町に引き取つていたのである。「そこにおのずから、潤一郎とせい子の同棲生活が始まつた」と野村は記しているが、△同棲▽はともかく、潤一郎の内部にナオミ的女性像が芽生えはじめることは注目されてよい。少女を自分の好み通りに育てあげるといふ男の夢想である。

この年、六月二十七日、芥川龍之介『羅生門』出版記念会が日本橋のレストラン「鴻の巣」で開催され、小宮豊隆、有島生

馬、豊島与志雄、佐藤春夫、久米正雄らに加えて谷崎も出席した。当時、文壇的地位を確立していた唯一の人である谷崎を迎えた芥川は非常によろこんだという。谷崎の「純白の麻の背広に白靴」という出立ちは、かなり目だったことだろう。この会を企画したのは江口渙と佐藤春夫であり、出席を乞うために「上山草人方で一面識あつた僕が、久米や江口、赤木桁平、さうして当の芥川までまじへた数人を、どやどやと小石川原町の谷崎家へ、訪問ははじめてであつたが案内して行つた。六月はじめ梅雨あけごろの一日であつたらう。」「うぬほれかがみ」／「新潮」昭36・10）とも言い、「潤一郎と僕」（谷崎潤一郎全集月報2）改造社 昭三・六）では、「江口渙が芥川龍之介の羅生門出版の祝ひの会の發起人に谷崎を加へる件に就て、谷崎を訪問するので、ひとりでは具合が悪いからといふので僕を誘つたのである。江口にして見ると、僕がかねて谷崎に面会する機会を欲してゐることを知つたので、僕を誘ふ氣になつたに違ひなかつた。」とも書いて、記憶は定かではない。^(注)

(注1) 伯父久兵衛は、大正四年八月、長男の放埒のため伊豆の大島通いの船から投身自殺をとげた、と全集年譜にある。野村尚吾の『伝記』によれば、谷崎の祖父久右衛門は、長女の花に外神田の老舗江沢家から次男の久兵衛を婿に迎えて分家させ、次女半には真鶴館をつけて江尻家へ嫁に出し

たが、三女関には、やはり長女の婿久兵衛の美弟倉五郎を

(大正八・八・一三 塩原温泉門前、宮本誠方より)

婿に迎えて分家させた。伯父が自殺後、倉五郎が蠣殻町の
経営の監督を任された背景には、こうした関係があった。

(注2) 佐藤春夫「詩文半世紀」(昭三八・九 読売新聞社)

で、この日のことを、谷崎と知り合いらしいから案内せよ
と江口渕が言ったので、芥川や赤木、江口たちを同伴し、
芥川自身が直接、出版記念会への出席を依頼したと記して
いる。

(8) 「近代情痴集」の出版ほか——新潮社へ二通

御手紙ならびに校正刷正二落手いたし候、永井氏序文非常に
面白く拝見いたし候小生の寫真は真黒にて不明瞭なりと存候へ
ども今少しハツキリと出来ざるにや、もう一度刷り直してお見
せ下さるやう願上候。猶又「著者谷崎潤一郎君の肖像」とある
の字は漢字の之にお改め被下度候、扉は非常に結構豫想外の
出来にて愉快に候、

小村氏の方まだ出来ぬ由小生も不少ヤキモキ致居候、早速催促
いたす可く候、總扉表紙等の校正も出来次第御送り被下度候。
子供さん御病気の由御心痛察入候。當方無事御安神被下候。

八月十三日

谷崎

中根駒十郎様

○
ともに新潮社編集部中根駒十郎宛。全集書簡番号四一A、四
二A。前者の発信地、塩原温泉門前宮本誠方については、すで
に野村尚吾「伝記」に説明があり、市居義彬「谷崎潤一郎和歌
集」(平二・一 曙文庫)の解題にも「塩原温泉の妙雲寺門前

書簡にみる谷崎潤一郎(下)——出発期の谷崎とその周辺——(永栄)

先日手紙を以て「ミゼラブル」の事御願致候處いまだ不到着、
如何に候哉御都合上候。それから舊臘御約束致候單行本新刊
の事いづれ拝顔御相談可致候へども改造新年號所載小説、及び
大正日々掲載のもの、又近く大坂毎日へ出る物等その外に二三
近々に発表するものを加へ三四月頃出版の事にいたし度候。大
坂朝日へ出した「天鵝絨の夢」はあまりに悪作故、その外の悪
作と共に此れを一束して天佑社に與へることにいたし候右又御
承知被下度候
先は要用まで
草々

三十日

潤一郎

中根様

二伸

「ミゼラブル」は品切れに候哉折返し御返事待入候
(大正九・一・三〇 相州小田原十字三丁目七〇六より)

の宮本家には、大正八年夏に家族と共に二階を借りて自炊し、その間の出来事を随筆風に書いた「秋風」を発表したことがあった。」とある。「秋風」(新潮)大八・一一)は、その頃塩原温泉へ遊びにきた妹S子(せい子)やT、A子(鮎子)の姿を描いたもので、特に家庭の不和を感じさせるものではない。むしろ、ここには鮎子に対する愛情豊かな情景が描かれているのである。

飯の時などに妻とS子とがをかしなことを云つてからかたりすると、A子は何處で覚えて来たのか「驚いた表情!」と、大きな聲でさう云つて、膳の上へ箸を投げ捨て、両手をひろげながら、その所謂「驚いた表情」をして見せる。しまひには大人までが真似をして、何かと云うと「驚いた表情」をやつて笑ひこけた。

そのほかにも「私」は、A子の頼みに応えて「軽業」(仰向けになって子供を足で高く持ちあげる)をして遊んでいる。S子の恋人Tが登場すると、妻とA子が帰宅するという設定以外に気にかかる部分はない。ところでTとは誰であろうか。岡田時彦が今東光か、どちらか不明なのだが、岡田時彦「春秋満保魯志草紙」(昭三・一一 前衛書房)の序文で、「僕の記憶にして誤まりがなければ、彼が初めて當時小田原に住んでゐた僕を訪ねて来た時は、たしか十九歳の少年であつた。僕は一見して彼を美少年であると思つた。」と記しているから、「記憶に」

「誤まりがなければ」岡田が谷崎と出会うのは、小田原に転居した大正八年十二月末以降でなければならず、大正八年秋の伊香保の場面には登場できないことになる。そして「秋風」に描写されるTの姿は、「彼の體は筋肉が赤黒く引き締まつて、断から柔道の逆手の話や喧嘩の話を得意にするだけに、如何にも精悍な腕白小僧らしい骨組みである。」という形容からは、曙町時代から頻繁に訪れたという今東光である可能性が強い。岡田は前出の著書では、幼い頃は女の子とばかり遊び、「兎角患ひ勝ち(ま)な」といった文面から判断すると時彦のイメージではないように思われる。なお細江光(ま)によれば、この年の夏は、笹沼一家も一ヶ月ばかり塩原温泉へ避暑に出かけた。塩原温泉塩釜にあつた笹沼の別荘が近かつたため、食事は別荘ですませたらしいと推測されている。

だれしも自著の出版は楽しみである。谷崎が本の装丁に凝り始めたのは、いったいいつ頃からだろうかと、この手紙を読むと考えさせられる。大正十三年九月一日付の書簡ではクロス見本を二冊送らせ、選定していることがわかる。特に、昭和初期に創元社から出した、和紙を使って特別な刷りを施し、挿絵や写真を入れ、装幀にも工夫をこらし、独特の活字さえ作つた「吉野葛」「盲目物語」「蘆刈」「春琴抄」など特装限定本が有名だが、これらの手紙を見ても、かなり初期から、作品の出来具合や組み合わせを考え、内容によって版元を決めるなど気を配つ

ていることが窺い知れる。愛着に近い感情である。活字の大き

さ、四六版と菊版の違いなど体裁にも細やかな神経を使っている様子は「装釘漫談」(昭八・六)に詳しいが、たとえば、まず作品や本は、内容、形式、体裁、装釘、紙質、活字の組み方、すべてが融合してできあがるもので、できれば自分が装釘するのが望ましく、ここ三四年は自分で考案していること。画家に依頼するにしても、なるべく余計な線や色彩を使わず、クロスや紙それ自身の地質と色合いを内容と調和させることが理想であること。特に日本語は上から下へ読み下すのだから、縦より横を長くする方が読みやすい道理で、四六版を横にすればすむことで、要するに和本仕立ての長所を応用することだと提言している。ちなみに、この随筆は「青春物語」を菊版にと希望する谷崎と、販売戦略としては四六版が有効と主張する版元との意見の相違が執筆の動機となった。

さて、新潮社の編集者である中根駒十郎への手紙はかなり収録されているが、当然ながら、ほとんどが金銭的なものと原稿出版に関する内容である。前者の書簡は、大正八年九月に上梓された『近代情痴集』に関するもので、四六版四百五十一頁、装幀小村雪岱、定価一円六十銭、と書誌にある。収録作品は「戀を知る頃」「おオと巳之介」「富美子の足」「憎念」「西湖の月」「玄井三蔵」「ハツサン・カンの妖術」の七編で、谷崎が気に入った永井荷風の序文がついている。八月四日、谷崎自ら荷

風を訪問して依頼したものである。

願ればいつしか十年のむかしとなりぬ鴉外森先生を師と仰ぐ人々相寄りて昂といふ雑誌を出せし頃なり谷崎君初めて小説麒麟を雑誌新思潮に載すつゝいて刺青の作あり少年の一篇を昂にかゝるに及びて声名遂に先輩を凌ぎぬわれ其の頃筆を三田文学に執れり子の新作を読むごとに感嘆措く能はず類にこれを称揚す(略)歳々その色調ますます濃艶にその形式いよ／＼華麗を添ふ芸術の美遙に造化の妙にまさるともの謂つ可しそも／＼子が芸術の神秘怪異にしてまた妖艶崇厳なる正に埃及太古の殿堂にも似たりと云はんか斯くの如きは寔にわが文壇未嘗てその類例を見ざる処縦しこれを西欧の文壇に求むるも亦僅かに仏蘭西のゴーチエーピエールイ等二三を得るに過ぎざるべし子はわが現在の文学に未曾有の恍惚並に戦慄の二大感激を創造したり作家たるの価値如何ぞ(後略)

作品は必ずしも質的に高いものとは言えないが、人情痴▽物語とハ異国綺談▽という趣旨ではよくバランスがとれている。十年前、「三田文学」に載せた賛辞は、当初「少年」に向けられていた評価を「刺青」に転換させるという付加的な影響力を発揮したが、荷風には、慶応大学における地位を脅かす動きを警戒する自衛の思惑があり、「三田文学」の発行元でもあり、単行本「刺青」(最初、広告では「少年」の題であった)を刊

行予定の初山書店には、発禁をさけ、販売促進のための宣伝という出版事情があつたという見方も否めない。^(注5) また明里千章や近藤信行が紹介するように、あの激賞の背後には「眠られぬ夜のために」のなかで記される「つかれきつた私自身の空想だけでは、もう私はとても、あの若い新進作家の書いた『少年』のやうな強い力の籠つた製作を仕上げる事ができないのだ。」といった荷風の羨望もふくまれていたかもしれない。だがそうした打算や文学的血脈の発見と共感とは別にしても、この序文が谷崎への好意に満ちていることは明らかだろう。いま改めて、当時に劣らぬ好意的な序文を貰つて、谷崎がどんなに喜んだかは想像に難くない。私の写真が真つ黒ではないか、もう少しならぬものかと刷り直しの注文をつける調子にも、どことなく余裕がある。

大正七年十月九日東京を出発して十二月までの二ヶ月間、谷崎は朝鮮、満州、北京、漢口、九江、廬山、南京、上海、また奉天にいた木下李太郎を訪ねたりして、十二月下旬まで単身で中国に遊んだ。文壇に確固たる地位を築いた作家が中国を訪問したのは、谷崎が先駆であると言われ、佐藤春夫や芥川龍之介もその後が続いた。大正十五年にも一月六日から二月十六日にかけて上海へ二度目の旅行しており、西洋文化を享受する先端としての支那趣味は昭和初年代まで消えることはなかった。しかし大正六年の作「玄奘三蔵」「ハッサン・カンの妖術」など

の収録作品からも分かるように、中国から印度にかけての文学にも強い関心を寄せていた。^(注5) さしずめ支那とは、西洋への憧れと、インドの純粹に東洋的な要素を合わせ持つ「ハ場V」として機能していたにちがいない。

大正八年は、次の意味でも重要な年であつた。前年末、中国旅行から帰国するとまもなく父は脳出血で倒れ、千代の献身的な看護にもかかわらず二月十四日に死亡した。家督を継いだ谷崎は、蠣殻町から本郷区曙町に転居。妹の伊勢、弟の終平、義妹せい子と住むようになり、佐藤春夫とも親しい交友が始まつた。年末には、娘鮎子が病弱のため、転地療養の意味もあつて小田原に転居し、それ以後東京にもどることはない。

*

谷崎は支那をインドへの一段階として、また西洋文化摂取のための手近な窓口としたが、洋行への望みも強く抱いていたようである。たとえば「明春四月フランスへ／旅立つ谷崎潤一郎氏」と大正十三年十二月十四日の「読売新聞」に、タキシード姿の写真入りで報じられているように、何度か洋行する気持ちになつたが、一度も実現しなかつた。

旅行の費用を作るのにもまた難渋したようである。二度目の支那行きのために、春陽堂から『潤一郎傑作全集』（大1〇〇―111）を出したのだと小島政二郎（『聖体拝受』）は書いている。本の装幀には気を使う谷崎だが、版權に関しては、金策の

ためなら、意外にあっさり譲渡したようである。最初の中国旅行の費用を捻出するための交渉に関して、江口渙は「谷崎潤一郎の思い出」（没後版全集月報4）で、春陽堂で垣間見た情景を次のように描写している。

私も春陽堂から短編集を出すことになっていたので、その頃は日本橋通三丁目にあった店に立ちよると、ちょうど谷崎潤一郎が版權売り渡し交渉をしているところだった。「でも、谷崎さん。版權だけはお売りにならない方がいいんじゃないですか。一たん手放したら、先にいつてまた本をお出しになるときでも、その分だけの印税はあなたの手にはいらないうから、……私の方では、買えとおっしゃればよろこんでうだいたしますけれど……」

木呂子という番頭がしきりに版權を手放すことを惜しんでいる。

だが、谷崎はきき入れない。「だって、きみの方で新小説の前借りをほとくの要求どおりにさせないんだから、版權を売るよりほかに金の作りようがないじゃないか」

しばらく押し問答のあげく、とうとう版權を売ってしまった。本で二冊分ぐらいのものらしかったが、何と何をいくらで売ったのか私にはわからない。

該当作品は不明だが、『近代情痴集』前後の大正七、八年に

書簡にみる谷崎潤一郎（下）—— 出発期の谷崎とその周辺 ——（永栄）

は、確かに春陽堂からの出版が多い。「あつもの」（大七・八）、
「二人の稚児」（大七・八）、「金と銀」（大七・一〇）、「呪われた戯曲」（大八・七）、「人魚の嘆き 魔術師」（大八・八）、「自画像」（大八・一二）、「女人神聖」（大九・一）と矢継ぎ早である。後者の書簡に出てくる天佑社がその間を縫ってワイルドの翻訳「ウインダミーヤ夫人の扇」（大八・三三）、「小さな王国」（大八・六）、「恐怖時代」（大九・二）を刊行している。大正十一年の同じ中根に宛た手紙に、「お艶殺し」「お才と巳之介」の件はずっと以前に木呂子氏からあなたに直接会って了解を取りつけたと聞いたと苦情を述べ、「春陽堂の方でも『法成寺物語』を快く譲つた関係もあり」といった一節があり、事実「法成寺物語」は大正十年七月、新潮社から出版されているので、金策のために、版權の譲渡（もしくは類似のこと）はかなり頻繁に行われていた可能性がある。

新潮社との単行本の約束は前年大正八年に交わされたらしい。「改造」新年号のものとは「途上」、「大正日々」は「検閲官」だが、「大坂毎日」へは何も書いていない。したがって新潮社「AとBの話」（大一一〇・一〇）に収録されたのは、上記の他に「AとBの話」「私」「不幸な母の話」「鶴唳」「月の囁き」「蘇東坡」など、八、九年の新作八編を連ねた。それにしても、「天鵝絨の夢」は悪作だから、その他の悪作と一括して天佑社へ与えるとは、いかに掛け引き上の表現といえども、主旨は明

快そして辛辣、さらに容赦なき出版社と自作への評価である。

(注1) 三谷憲正「大庭葉蔵」という《美貌の青年》物語―

岡田時彦の影をめぐる―(『昭和文学研究』三七集 平一

〇・九)を参照した。

(注2) 細江光「笹沼源之助・谷崎潤一郎交流年譜」(『甲南国
文』第四六号 平一・三)による。

(注3) 中島国彦「作家の誕生―荷風との邂逅」(『国文学』昭
五三・八)によって、最初の単行本「刺青」(明四四・一

二 初山書店)刊行に際して、当初広告されていた書名
「少年」が、荷風の称賛を境に、急速変更されたことが指
摘された。「刺青」というインパクトの強さが発禁への危

険性と販売戦略上の効果との間で揺れ動いたことは事実だ
ろう。最近では瀬崎圭二「永井荷風『谷崎潤一郎氏の作品』
の欲望」(『名古屋近代文学研究』一六号 平一〇・一二)
が、その問題を初山書店と永井荷風の立場から検証してい
る。

(注4) 明里千章「初期谷崎に於ける『颯風』の位置」(中村
三代司・松村友規編『三田文学の系譜』昭六三・一二三
弥井書店)や、近藤信行「谷崎潤一郎 東京地図」(平一〇
・一〇 教育出版)に指摘がある。

(注5) 小島政二郎「聖体拝受」(昭四四・一一 新潮社)に

次のような記述がある。

△その前後に、彼は「魔術師」「玄卦三蔵」「ハッサン・カ
ンの妖術」など、インドを舞台にした小説を書いている。

／彼の「雪後庵夜話」を読むと、「正直を言う」と、二十歳
時代三十歳時代、いや四十歳を越す頃まで、私の第一の夢
は「洋行」であった」と書いている。／が、私の会った頃
は、／「僕はヨーロッパなんかへは行きたいとは思わない。
今一番行きたいのはインドだ」／そう言っていた。インド
へ行く手始めに、まず支那へ行きたいと言って、その旅費
を作るために、それまでに書いた小説、戯曲の類をすべて
春陽堂に売る交渉に来ている潤一郎に出合ったことがあっ
た。▽

(注6)「震災前一寸疇さがあつた谷崎潤一郎氏はいよ／＼明
年四月頃フランスに約二ヶ年位の豫定で遊ぶといふ◇それ
が為め上京小石川の借楽園に滞在し改造社その他との契約
交渉中であつたが洋行費の準備も略々纏つて昨日帰神した
◇當の谷崎氏は「未だ確実に何日と決定したわけではない
が明年勿々出発したいと思ふ家族を連れて行くことは未だ
決めてゐない。たぶん一緒に行くことになるだらう」と。
という記事である。

(ながえ ひろのぶ・日本近代文学会会員)